



第73号
平成20年(2008)
10月15日発行
(年4回発行)

俳席のマナー

青木秀樹

連歌の時代から作品を巻き進めるルールとして、二条良基の『連歌新式』をはじめとする式目が定められていた。芭蕉翁は式目に関しては柔軟な態度をとったことが伝えられているが、古式を破ることがあっても、私に破るは稀也と去来抄に記されているように、付合のルールは守られていた。猫養会の式目は東明雅先生が根津芦丈師から伝授された伊勢流の俳諧を基本として、幕末に原田曲斎が芭蕉の作品を分析・考証してまとめた『貞亨式海印録』(安永六年自叙)の要素を加味して整理されたものである。式目は禁止事項というよりもよい作品を巻くためのノウハウであるので、猫養会の方々にはさほど煩雑でもない「猫養会式目」をマスターして、その式目を守っていただくように要請している。それ

こそが連句上達の近道、さらに連句普及の正道だと思うからである。

連歌会席のマナーについて、室町時代中期に飯尾宗祇が定めたものとされる「連歌会席二十五禁」が広く流布している。連歌の席も会席の一種であるため、連歌進行だけでなく会席のマナーについての指摘も多く含まれている。堂上人の連歌の席でも、このような掟書が必要だったのである。この「連歌会席二十五禁」については『連句年鑑』(平成十八年版)に廣木一人氏が「連歌会席・俳席における行儀」のタイトルで詳しく書かれているので関心のある方は参照されたい。

芭蕉翁が定めた正式俳諧の掟書は、芭蕉真蹟として伝わる「俳席掟書三箇条」が広く用いられている。「諸礼停止」、「出合遠近 但声先」、「一句一直 月花一句」の三箇条が俳席に掲げられる。「諸礼停止」は俳席では無礼にならない範囲で煩瑣な礼儀を省略すること。「出合遠近 但声先」は出勝ちの場合付句のできた者が重なった時に、近いところで句を採られた者が遠慮して句数の少ない者を優先する決まり。出句条件がほぼ同等であるときは先に声をあげた方を採るといふ決まり。「一句一直 月花一句」とは付け句に差合があるときはその場で一度だけは直して出すことができる決まり。時間を短縮して進行の円滑を図るためである。また、月花の句は一卷中同じ作者に偏らないようにする決まりである。

連句の席のマナーが「一座の法」として『連句辞典』に一項設けられている。そこでは、「連句の席はみな和やかに楽しくあることが望ましい。このため連衆に不快感を与えるような態度、ことさら放埒な行儀、振舞いは自から遠慮しなければならない」と説かれており、末尾に『俳諧無言抄』(応其著 慶長八年)の「会席作法の事」が紹介されている。

一出座遅参の事、二着座しなをこゆる事、三衣裳諸道具分際不相応の事、四難句禁句の事、五高吟或は雑談の事、六隣席の人とささやく事、七貴人或は稚児と同音に吟ずる事、八自分の句吟ずること、同講ずる事、九他の句難ずる事、況や他の句返して自分の句付る事、十他の句前の時付合言ひ顕す事、十一自分の句に付ざる内座を立つ事、十二若輩より差合繰る事、十三末座より句数好む事、同雪月花の句を好む事、十四睡眠あくび等の事。

連句他流派との交流が進む中で、猫養会は会員数の多さだけでなく、連句の基本をマスターしているという評価されている。連衆に不快感を与える行為や言説は、とかく本人が自覚していない場合が多い。「あの人は一緒の席に付きたくない」と疎外される前に、自分の言動を省みて直すべき点があれば、直ちに改めていただきたい。会員の方々には連句がうまくなるだけでなく、一座に気配りができ「マナーがよい」と言われるように努めていただきたいと切に願っている。

猫養会式目の整理

東 明雅

従来、猫養会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。それで、現在猫養会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

二 句数

- 1 句数は春秋三句より五句（普通三句）夏冬一句より三句（普通二句）とし、季戻りを嫌う。
- 2 恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

三 去嫌

- 1 同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。
- 2 同字・神祇・釈教・恋・無情・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りであるが、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。
- 3 人情自、人情他、人情自他半、人情無（場）の各打越および編を嫌う。
- 4 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

四 一巻の構成

- 1 発句は当季とし、切字を入れる。
- 2 脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。
- 3 第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。
- 4 発句使用字（月、花を除く）、及び

恋の字は一巻再出を嫌う。

- 5 発句以外に切字「や、かな」を嫌う。

- 6 表に神祇、釈教、恋、無情、述懐、懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。但し発句はこの限りではない。

- 7 月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一

- （二十韻ではウ一、ナオ五）とし、場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

- 8 花の定座はウラ十一、ナウ五、（二十韻ではナウ三）とし、引き上げることはあってもこぼさない。

- 9 恋は一巻に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。

- 20 韻ではどちらか一回でもよい。

- 10 かな止めまたは漢字止めの五連続を嫌う。

- 11 挙句は発句に返らぬよう特に注意する。

五 韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

六 仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

猫養会式目

一 心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

ねこみの第二十一号より転載

猫養同人会作品

平成二十年六月十五日首尾
於 新宿ワシントンホテル

歌仙「五十基の」

本屋良子 捌

五十基の風車の廻る麦の秋 良子
崖に飛び交ふ海猫の声 かりん
組体操男の子の脚の伸びやかに 雅子
早弁禁止申し渡され 洋子
書机の文鎮の影月清し 良
カートを引いて木の実降る町 良
そぞろ寒子連れ狼どこへ行く 洋
紙一重とか憐憫と愛 雅
告白は年増に背を押されつつ 良
女であること包み隠さず 良
サンチャゴの巡礼の道ながながと 雅
爪弾いてゐるギターG線 洋
嘆する度に胸板挟まりて 良
この世終るや冬ざれの月 良
ガリレオの望遠鏡が競売に 洋
スイカでさつと通る改札 雅
花万朶古刹の薨仰ぎ見ん 同
錆びたる刀の雛壇に映え 良
ナオ常節をつまみに酒宴盛り上がり 良
店の看板婆と番犬 洋
裁判員制度の結ぶ官と民 良
ひとり芝居の哀れ白塗り 良
振りかけるジェラシーといふ香水を 洋

歌仙「みぢんこの」

青木秀樹 捌

鉦ゆつくり外す麻服 雅
桐箱の夫の臍の緒いとほしく 良
丸山ワクチンその後だうした 良
副都心地下鉄線の開通す 雅
吾顔に会ふ蠟人形館 良
水底の逆さ三日月おもしろく 洋
おかめこほろぎ閻魔蟋蟀 雅
ナウ新豆腐繩にぶら下げ戻る父 良
山の暮しが身についてきて 洋
同窓会昔の夢をまた語り 雅
冒険ダン吉友に貸すまま 良
蒼穹に天使の梯花吹雪 良
お玉杓子はみな四分音符 洋
連衆 登坂かりん 武井雅子 大島洋子
みぢんこの眠りを覚ます梅雨鯨 秀樹
河骨動く大学の池 あや
剣道場少年の声響きあて アンズ
販売機にてもとむ飲み物 碧
山の端を染め夕月の昇り来る 郁子
やっと到着初獵の客 や
とれ立ての茸広がる土間の隅 郁
ミニスカートで宿題を解く 碧
バーチャルの少女が笑ふウェブサイト ア
助けてやるよどんな時でも や

年齢を忘れて深く愛し合ひ 碧
月のかそけき闇汁の会 ア
崖に立ちはぐれ狼吠えたつる 碧
震度六てふニュース突然 郁
古疵も思ひ出となる旅靴 や
手品師囲み拍手喝采 碧
ゆつくりと刻の流るる花の里 や
蛙といふは縁起よきもの ア
ナオ跪きいとねんごろに御身拭 や
映画村より装束の人 郁
本当は猫だったのだ先生は ア
化かし化かされどろどろの仲 郁
暗きより恋の迷路に入りこみ 碧
びつちり水着脱がす妄想 や
押されれば自然に落つる心太 樹
ほんやり空を見てるニユートン ア
ドーバーのトンネル周辺古戦場 碧
僕の伯母さんしゃべりづめなり や
釣瓶より盥に移る後の月 碧
つひにやつたぞ新酒金賞 ア
ナウ爽やかに孫に車で連れ出され 郁
江戸時代から残る富士塚 ア
このところ膝の痛みにサロンパス 郁
なんば歩きが身についてくる や
花咲けば気もそぞろなる留学生 樹
あちらこちらに小綬鶏の声 郁
連衆 中林あや 松島アンズ 松本 碧
東 郁子

歌仙「副都心線開通」

染谷佳之子 捌

梅雨晴や副都心線開通す 佳之子
 夏服で立つ若き駅長 恭子
 こまごまと電子手帳に記録して 文子
 暮しのヒントこれだこれだと 英子
 タワー越し月がぬつくと昇りたる ゆみを
 相模甚句を復習ふ新涼 恭
 きつぷよく可盃を干す今年酒 英
 じつと見詰める恨みがましく を
 西施ほどの嫺かさなどなきものを 同
 もう消え失せた女大生 文
 フリーター資格たつぶり履歴書に 恭
 煙突掃除煤払ふ月 文
 何やらん僧正めきぬかじけ猫 同
 コスチュームブレイいつも満員 英
 天からのフォーレの曲に耳澄ませ を
 清貧といふささやかな夢 恭
 五合庵訪ねくるのは花ばかり 英
 まだ暮れかぬる外で遊ぶ子 文
 ナオ春蜜柑の箱に添へたる母の文 恭
 波おだやかな瀬戸内の海 文
 あの蛸は食ふたのかしら翁殿 を
 閣議決定煙幕を張り 英
 地元から祭の寄付の領収書 恭
 オーデコロンの匂ふもみあげ 之
 肉付きも笑い声にも惚れ直し 英
 紅の余白に仮名を筆太 之
 介護士は同じ時間にベルを押す 恭

横隔膜のきしと音する

糞虫のゆらり揺らりと十三夜

名山ツアー爽涼の頃

ナウ芸術祭ザルツブルグに集ひ来て

生きるか死ぬかそれが問題

停年のあとに勤める子の会社

銭勘定は他人まかせで

初花を飾る百万石御膳

未来の使者に立てる引鳥

連衆 式田恭子 橘 文子 佐古英子

青島ゆみを

猫養会例会作品

平成二十年七月十六日首尾 於 江東区芭蕉記念館

歌仙「海の秘密」

原田千町 捌

ヨット沖へ海の秘密をとりにゆく 千町
 サマーコートはピケの純白 一枝
 美術館巨匠の対比様々に 千恵子
 記念切手をひとつ購入 政志
 丸ろき月山の端ほのと登り出で 幸子
 邯鄲の会ちよつと乾杯 惠
 ハンターは猪射止めしと嬉しさう 志
 瑠璃看板美女がにっこり 枝
 熱烈に抱擁口づけ街の中 惠
 ほられちまったイタリーの旅 志

エアポケット機長一瞬爆破かと

般若心経月の冴え冴え

にじり入る夜話の茶事ほのあかり

和風を愛づる異国の人

文豪の書齋の隅のクラブサン

ぶちの家猫ぴんと耳立て

遇不遇かこつことなく花ふぶき

まってましたと春の地芝居

ナオ鮎子の釘煮今年も送り来る

左の奥歯また疼きだす

エジプトの木乃伊に残る外科手術

死んでも消えぬ肉親の縁

禁断の木の果実知りたる園の内

蛇とは化して君と契らん

羅を着て薄情な京女

裏も表も使ふ風呂敷

妖しくも浮世の興のつり来て

褒似の裔か火事が大好き

ベンチャーのビルくつきりと照らす月

子供等の指す雁の列

ナウ菊供養導師佛浮かび来る

夢にも嬉し御小言でさへ

お手玉を三つ上手に繰って

巡礼に出る刎頭の友

龍神の花の奥にぞおはします

東風やはらかに辿る畦道

連衆 西田一枝 鈴木千恵子 峯田政志

飯島幸子

歌仙「山法師」

佐々木有子 捌

山法師一日二便のバスを待つ 有子
 青田の道に軟らかな風 忠史
 姉弟偏付き遊びきりもなし 佳之子
 乗馬気分で椅子に跨る 秀樹
 はるばると釣果おみやげ月の客 志世子
 なんと背中に藪虱つけ 樹
 ウ 秋場所に横綱昇進賭けてをり 史
 ゴブラン織はお決りの柄 世
 龍涎の閨の香りにとろかさされ 之
 世間知らずの姫は奔放 樹
 助郷の民は泣き泣き渡る川 史
 さつと拭き取る化学雑巾 之
 月昇るスモッグ警報解除され 史
 ジャズの流るるバーに凍蠅 樹
 おあいそは九千八百割り勘で 之
 航空券は窓際の席 世
 花盛り踊る平成中村座 樹
 巢立ちの鳥が六方を踏み 之
 ナオウららかにさみしがりの狎とある 世
 茶会は苦手あぐら大好き 史
 太い筆墨たつぷりと達磨の目 同
 初児誕生妻はえらいぞ 樹
 惚れ直す祭笛吹く男振 之
 モーツアルトは媚薬にもなる 世
 小悪魔が頭の隅に棲みついで 樹
 大統領の座残り少なく 有

歌仙「五位鷲の」

山本要子 捌

決め球を無心にふって逆転打 史
 テレビが届き我が家にぎやか 世
 月の舟スカイツリーの予定地に 之
 そつと集める芋の葉の露 史
 ナウ濁り酒効なじみと酌み交す 世
 元機関士のいぶしたる顔 樹
 スケッチは白壁続く蔵の町 同
 がらくたばかりねむる長持 之
 花筏満ちて流れの見えぬほど 有
 遠足の列乱す園児等 世
 連衆 根津忠史 染谷佳之子 青木秀樹
 秋山志世子
 五位鷲の飛ぶをためらふ渡し跡 要子
 川面を抜くる梅雨明の風 文子
 料理長レシビ解説大仰に 曉巳
 乾杯グラス持つ手震へる 弘子
 月を背に覚えたてなる唄二三 徒司
 運動会は家族総出で 霞
 ウ 垣の内殖え続けをり曼珠沙華 文
 警備係はだれもイケメン 弘
 金力無くてもヒモはのうのうと 巳
 わたしを縛る恋の羽衣 文
 何回も読み返したる西鶴本 司
 隣の猫がのっそりと来る 巳
 ぶつつりと霜降りかます骨を噛む 文
 熱爛まはる車座の月 霞
 勘定がなければいと独言 司
 名古屋育ちの強い遺伝子 文
 観世音花の余生をたのみます 弘
 古墳訪ねて巡る弥生野 同
 ナオ校長の訓辞端折らす黄沙きて 同
 ゲゲゲの鬼太郎足駄躍らせ 文
 郷愁の単線走る港町 同
 知らぬ間に閉めた万屋 巳
 待望の孫に購ふ武者人形 弘
 あやめ咲くなり柳川の堀 巳
 やはらかき闇が幸せ忍びゆき 文
 スポットライトに浮かぶダンサー 霞
 ロートレックムーランルージュに愛求め 弘
 竹の針にて名盤を聴く 巳
 良夜なり宙に遊べる夢心地 文
 後れ蚊止まる幼児の腕 霞
 ナウ交差点時代祭の山車通る 弘
 占ひ頼り転居転職 霞
 宰相はガンリン税をうやむやに 同
 砂糖のきつい安物のジャム 巳
 花万朶推して読み合ふ額の文字 要
 天に届けとしゃぼん玉吹く 弘
 連衆 橘 文子 島村曉巳 松原弘子
 杉内徒司 高塚 霞

歌仙「雲の峰」

武井雅子 捌

大川や水面に雲の峰いくつ 雅子
 額きあつて揺れる向日葵 アンズ
 電子辞書鳥の啼く音にききほれて 央子
 ドーナツ出来たママの呼ぶ声 達子
 夕月を待てず幼な寝入りたる 國光
 見知らぬ国の木の実降る屋根 國
 秋裕行先告げずそつと出て 達
 辺りうかがひ奪ふ唇 央
 失恋をしてはやせたり太ったり ア
 まだ危なさう輸入食品 國
 わたつみの神みそなはずストライキ ア
 氷の橋に千々の月かげ 央
 冬の雷金平糖を撒き散らし 國
 ピエロばかりを描いてゐた人 達
 笑はせてとことん己が身を責めて 央
 招き猫らしお手もできます ア
 暁の力溜めある花の山 達
 フランス帰り朝寝楽しむ 國
 ナオお蚕さまは国母飼はるる「小石丸」 達
 舞ひ納めたる弱法師の能 央
 五円玉ご縁を願ふお賽銭 ア
 夕立の中宝くじ買ふ 國
 交番の風鈴ゆれて巡查留守 達
 その一言で止る少年 ア
 この道はもう戻れない私たち 國
 オルフエを追つて走るユリデイス ア

何や彼や理由をつけてコップ酒

賀茂鶴もよし天狗舞よし

月の宵祖父愛唱の祝ひ歌

北前船の霧を出でくる

ナウ持たされし携帯電話そぞろ寒

同窓会に集ふ七人

肩書きは町内野球マネージャー

旅の硯をやをら取り出し

花万朵御堂に小さき微笑仏

高々揚る平成の風

連衆 松島アンズ 遠藤央子 篠原達子

飯塚國光

歌仙「戦記読む」

梅田 實 捌

夏深し老眼鏡で戦記読む 實
 百日紅の咲き続く庭 孝子
 一声の鋭き笛の響きさて 美奈子
 組体操のつくる楼閣 昭
 ぢやあまたねメールしてよね初月夜 啓子
 値が気に入りでさんま買ふなり 孝
 日常は棚に片づけ秋の旅 同
 セピア色したスナップを持ち 奈
 脆きシバの女王に渡す文 啓
 身をも心も蕩かすまどろみ 奈
 虎落笛泣く子は山に捨てられる 孝
 慄履いて仰ぎ見る月 昭

タリパンの勢ひ今や盛り返し

握手を交はすそれも仮の世

名人位盤上に額よせあひて

肉の団子はころと転がる

勘定は大家まかせの花見酒

弥生狂言馬の脚にて

ナオ黄塵の車をぬぐひ出勤す

海匂ひ来る築地界隈

故知れぬ神も病も異国から

お守り札の蘇民将来

蜘蛛の囿に捕はれグリーンアドベンチャー

君の瞳に僕は痺れる

気風よき二歳上なるお姉様

恋の終はりにブラームス聴く

モスコイの水銀柱は底をさし

あれよあれよとあがる諸物価

月匂ふ母の袖の袖袂

吐息のやうに霧の流れる

ナウ精霊舟ついと押しやる湖の波

何と不器用生まれつきかも

朝市の婆の算盤五つ玉

巢立ち待たるる鸛なり

年毎の花に心を魅入られて

夢にまた見る古里の春

連衆 坂本孝子 鈴木美奈子 松原 昭

小池啓子

歌仙「森下の」

内田遊民 捌

森下の朝顔市や神明宮 遊民
 風鈴の音の止まぬ境内 靖子
 積み木つみまた崩してはきりもなし 淳子
 タイミングよく茶菓子供され 泉子
 坂半ば息整へる良夜にて 常義
 秋の灯洩るる白亜館より かりん
 腹こすり紅葉鱈は湖の底 淳
 たまにゆっくり大の字になる 同
 武蔵野夫人読んだ頃から恋あまた 同
 ゲバ棒捨てて官となる君 泉
 秘書室は美形ばかりを揃へて 淳
 湯豆腐少し火の通し過ぎ 義
 凍て月に猫なぶりつつ独り酒 泉
 あかんべえするアインシュタイン 靖
 古都の町ゆるキャラ情報賑やかに 泉
 企業誘致に励む役員 同
 場所取りの人のまどろむ花筏 同
 J O A K 東風に乗りたり 同
 ナオ豪華船ゆったり進む春の潮 同
 瓶で届いたぼるとがる文 同
 アスリート夢を北京に託すらん 同
 笑い残して消えるマジシャン 同
 病棟の喫煙室で知り合つて 同
 M Y S I N といふきつい香水 同
 熱き砂裸足で踏んで逃避行 同
 試写会で聞く誰のいびきか 同
 トボロジー君の後ろに君がある 同

悼 鈴木春山洞師 歌仙「紅花の」

内田麻子 捌

竿竹売りのぱたりこなくて 靖
 懐かしき大正琴の月今宵 同
 錆びた門牧閉ざす頃 淳
 ナウ赤い羽根父はしつかり胸に付け 靖
 ゆるり旋回仰ぐセスナ機 義
 吊り橋は山の天気で見え隠れ 同
 新型携帯長き行列 同
 花惜しむ画布一面に墨散らせ 同
 両手広げて掴む初虹 泉
 連衆 関口靖子 上月淳子 青木泉子
 生田日常義 登坂かりん

紅花の混りし仏花買ひにけり 麻子
 降りみ降らずみ続く梅雨空 美保
 デザイナー鞆の意匠次々に 文子
 取り出したる鍔拵抜き 碧
 気が付けば高層の窓月昇る 弘子
 辺りを拂ふ鴉の一声 蓉子
 馬市へ爺の育てし仔馬曳く 文
 帽子ななめに少年の騎手 碧
 入場式トランペットは高く鳴り 保
 胸の鼓動はあの人のせい 弘
 永遠を誓ったこともあつたつけ 文
 ヘッセの朝とカミュの夜と 蓉
 雪深々サナトリウム月の蒼き月 文

冬の莓をたつぷりと盛る 保
 原油高忽ち困る食料品 弘
 投資マネーは踊る怪獣 碧
 乳母車幼なの眠り花の道 保
 止まる逃水人といっしよに 碧
 ナオ波瀾富士も霞める駿河湾 蓉
 晶子の歌碑はあらぬ方向く 同
 古ぼけたこの銭湯にもジャグジーが 同
 メタボの裸時に気にして 蓉
 「求めない」本屋大賞受けて売れ 保
 いつか来るだろ長男の嫁 麻
 韓国にゴールデンミスが増えてゐる 碧
 愛のDNA信じやう 文
 神前で甘いくちづけ長くなり 弘
 アイヌの祭りカムイミンタラ 保
 月皎々林檎酒造る酒の蔵 碧
 暮仇が来る苞は錆蝕 文
 ナウ秋深しソナタはすべて短調に 保
 年金調査事もなくすぎ 弘
 鉄棒の選手天地を逆さにし 文
 からくり人形こまやかな所作 文
 花めでの終りに八重の花房も 碧
 あさぎまだらにシャッターを押す 蓉
 連衆 高瀬美保 橘 文子 松本 碧
 市野沢弘子 五味蓉子
 平成二十年六月二十六日 首尾
 於 梶ヶ谷 房連庵

内田麻子

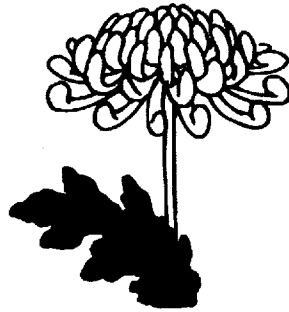
鈴木春山洞師の訃報を御親戚の方よりいただき、奥様も御療養中と伺い、房連会の六月の集いに、自然に悼句が選ばれて追悼歌仙となりました。

春山洞師と云えば、何と云っても平成二年連句が国民文化祭の正式部門となった松山大会に力を尽された事、当日は皇太子殿下も御視察に見えられた事が思い出されます。松山子規記念博物館講堂の座に参加して、記録を辿ってみると、中島啓世さん捌の半歌仙でした。平成二年十月の大会から間もなく、平成三年一月十三日東京の八芳園で、高藤馬山人先生追悼連句会があつて、春山洞先生捌の歌仙「初富士」の巻にも一座いたしました。

初富士や糸の切れたる放れ風 高藤馬山人仏
鳶のひよりと舞ふ去年今年 鈴木春山洞
目貼り剥ぐ久濶のひと健やかに 井出樺晴
とつづく十人以上の連衆でした。

その後も何度もお目にかかりましたが、三年程前文音のお誘いがあり、表六句位は出来たのが、お附合の終りでしたでしょうか、私も八十路に入り、先師と仰ぐ方をなつかしむ

機会が多くなりましたが、春山洞師の温顔を思い浮べつつ、この道一筋に行かれた御生涯に感謝と哀悼の意を捧げたいと思います。



連句は誰のものか・再論

青木秀樹

前号巻頭掲載「連句は誰のものか」に対して会員の方から「連句は捌きのものではない」という投書をいただいた。何であつても反応があることは喜ばしいことであるが、その論旨に連句という文芸について誤解があるようなので、追加説明を加えたいと思う。

投書の主旨は「著作権法」では思想または感情を創作的に表現したもので、文芸、学術、美術、音楽に属するものには、排他的に利用する権利が認められている。従つて、連句作品を捌き手のものとするのは著作権の略奪に

当たる」というものである。

連句は、連歌から派生したもので、著作権という法体系が存在しない時代からある日本古来の文芸である。連句の本質は捌き手を中心に連衆が参加する協同制作の文芸であることは、いまさら言うまでもない。このような連句作品を構成するそれぞれの付句については、著作権論議になじまないものだと思う。

連句の座では、捌き手が連衆から出された付句案を吟味してその中から一句を治定し、それを繰り返して一卷を満尾する仕組みである。その際捌き手は①その句の内容と情緒の持つ「付味」、②三句がらみ、観音開きにならないように打越からの「転じ」、③形式面から「去嫌・句数」、「自他場」、「遠輪廻」などを基本的な判断基準としてよりよい句を採用する。しかし時には句案を手直しして採用することもあり、表現に不備があれば手直しすることもある。更に、一卷を満尾した後で、序破急の構成、付味の改善、障りの解消のために校合を行なう。森山鳳羽捌きのある作品で、校合の結果「俺の句は、の、の字が残ったほど」という初心者のお話さえ残っている。「山

襖」九号)

座における手入れも満尾後の校合も、捌きを務めたものの責任であり権限でもある。完成した連句作品は、捌き手が連衆の協力を得て作り上げた創作物になる。従って、連句作品は「一巻全体でひとつの著作物」であり、それを構成している一句一句はあくまでも「捌きの目と手が入った」部品のな存在である。連句作品の中の付句を「個人が創作した独立した創作物」というのは、連句創作過程からみていささか無理な論理だと思われる。

連句において個人の創作物である句案の手直しはならぬということになると、一座の進行は滞り、連句の座が成立し難い。山本健吉氏が「俳諧におけるの十三章」(昭和二十七年「純粹俳句」)に書かれているように、連句の「座」は默契・合意・共犯の意識によって結ばれたものであり、それが連衆心と言われるものである。権利の主張よりも、連衆心を大切にして、連句を楽しみたいものである。

事務局便り

◇入賞おめでとうございます。

第二十回全国連句新庄大会

第二十回記念大会賞

鈴木美奈子「葦咲くや」

優秀賞

鈴木了齋「かはほりの」

中林あや「足長手長」

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

篠原達子様 一万円

山寺たつみ様 五千元

◇平成二十一年猫養会初懐紙

日 平成二十一年一月十八日(日)

時 十二時より十七時(受付十一時半)

場所 ホテルフロラシオン青山

(地下鉄表参道駅徒歩五分)

案内状に地図添付予定

電話 03-3403-1541

港区南青山四一七七一五八

◇平成二十一年亀戸天神藤祭

平成二十一年四月二十五日頃

◇猫養作品集第十九号原稿募集

○応募用紙 B4判指定原稿用紙

ワープロによる原稿はB4サイズに拡大のこと。

○形式自由 一人一巻

但し原則として歌仙までの長さとする。

○猫養会員の捌き作品 平成十九年十二月以降の作品

○作品は、最初に捌きと一連の作者名をフルネームで書いて下さい。自、他、場、季、通し番号は記入しないこと。

○新かな、旧かなの別を明記して下さい。

○締切 平成二十年十一月末日

○応募に際しては「猫養通信」第七十三号(この号のP2)「猫養会式目の整理」と「猫養作品集」第十七号「猫養作品集」の編集を終えて」をお読み下さい。

○送り先 鈴木千恵子

〒202-00012

西東京市東町四一四一二八

☎ 0424-2317817

季刊 『猫養通信』第七十三号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二一二十一一十六

編集人 猫養通信編集部